

俳句雜誌

空

空

令和二年一月三十一日発行

第17巻6号

通巻第88号



2020・1

SORA 88号

五十三句

柴田佐知子



神となる途中の大樹鷹渡る

月光に坐してこの世を遠くせり

神鏡のうしろの山を猪荒らす

金輪際貼り付く護符や初時雨

罨掛けし辺りの闇の重くなる

猟犬に血止めの布を巻き付くる

猟銃を掛けて獣の山に寝る

今日の傷舐めて静かな猟の犬

甲冑にひと形の闇寒波来る

虎落笛絵巻の中に血が流れ

幾万の声挙げてゐる霜柱

霜踏んで流人のごとく歩きけり

冷え切つて骨格標本の気分

闇汁へ袋に動くもの提げて
獄卒のごとく闇汁囲みけり
闇汁のどれも怪しき匂ひせり
闇汁の箸に何やら長きもの
しぐるるや舎弟といふは辛さうな
煮凝や父なきあとの暗さとも
今生の端に咳き込む夜の母
歳晩や藏に動かぬ父祖の闇
長老の運び込まるる初座敷
繭玉や白寿に近き母の声

四方の春身を折るやうに母が坐し
赤子まだ覚めず初湯に浸されて
神前は大きな日向初雀
どこまでも転がりさうな厚着の子
地球の芯捉へて独楽の乱れなし
音立つるやうな罅あり鏡餅
筑紫野の端は潮の香若菜摘む
荒灘は光まみれや弓始
寒紅のグラス拭ひし別れかな
枯野ゆくいつか魂だけとなり

百峰のこぞりて鷹を迎へけり

夜は人を引きずり込まむ大花野

何もかも無くて冬田のくつろげり

聖哲の貌となりゆく枯蟪蛄

霜の花馬の総身ゆるびなし

夜の山の巡る底ひや神楽舞ふ

竹林の闇のうねりや神楽笛

荒星の空が蓋する里神楽

畏掛けし山くろがねとなりけり

直線となり駆け戻る狩の犬

もう猫に行けぬ犬にも肉一切れ

脈打たぬ顔となりゆく霜夜かな

雪降るや詮なきことは無きことに

狐火を前へ後へ出奔す

セーターの大きな胸に迎へらる

山茶花や腹がへつたと猫の声

化けもせぬ狸を飼うて注連を縋ふ

策尽きし軍師のごとし着ぶくれて

例のなきことは却下や寒に入る

風花や赤子が繭のごと眠る

福岡 高倉和子

八月や柱時計の鈍き音
青々とのけぞる竹や初嵐
秋雨の砂に染みゆく早さかな
新藁の散らばつてゐる納屋の前
熱き息こもる牛舎や星月夜
陣取りの石の丸さや鰯雲
稲光り逢瀬のごとく紅を引く
伏せ甕の回りは秋の草ばかり

福岡 柴田志津子

黒島や聖尼の鳴らす鐘澄めり
赤秀樹の気根すさまじ隠れの地
防風林に隠れてオラシヨ雁渡し
鯊跳ねて川面の出島歪みたる
オランダ坂秋の日傘をひと回し
まつすぐに雨後の日射しや雁来紅
秋惜しむがらんだうなる島に立ち
鳥渡る軍艦島に墓は無し

東京 中田みなみ

カレンダーも二枚となりぬ木守柿
砂時計使はぬままに日詰まる
初霜の地窓明りとなりにつけり
胸に寄する湯舟の柚子や奇蹟あれ
初夢の端に触れたる犬の息
羽子の音や解溜りの見ゆる路地
鯛焼の列に可愛ゆき幕の下
鬼子母神前で声上げ焼諸屋

長崎 荒井千佐代

投函す立待月の光添へ
三彩の緑深まる寒露かな
台風圏大鍋に湯を滾らす
武相荘二句
禅寺丸柿たわわに正子もう居らず
草の花正子好みの壺に挿し
原つばの天涯孤独いぼむしり
胸元に食べこぼし跡案山子翁
全頭の死をもて豚舎秋夕焼

福岡 岸 洋子

青竹の涼ひろごれる能舞台
祭法被干す大灘に袖広げ
大岩をたばしる神の水澄めり
刈り草の匂ひ神殿つつみたる
くろぐろと護摩焚の跡鷹渡る
生簀の紐鳥居に結び神の留守
夏草や墓あれば墓眺めをり
村の名も字名も消えて日短か

広島 戸栗末廣

青葉木菟素直にをれば聞こえけり
夜更けまで月下美人を待ちぬたり
すぢ雲のいよいよ遠し下り鮎
こまごまと水音とどく秋簾
初盆の田んぼはそよぎはじめけり
肩書のなき集りや鰯雲
かなかなのつらなる川を下りけり
図書館の馴染みの席や初紅葉

北九州 深川淑枝

朝霧の切れ目山顛蒼く立つ
落葉松の林や霧の擦過音
鷹の立つ巖は人跡未踏なる
落石の乾きし音や岩枯梗
蕎麦咲いて日矢たわたわと佐久平
まなうらに昏き樹海や桃啜る
讚美歌の堂をもれくる花野かな
教会の丸太の椅子や小鳥来る

福岡 角野良生

ホタル科の一昆虫に過ぎませぬ
滝怒濤山の力をまのあたり
滝清し注連も不動も見当たらず
雅とも思へる蛇の泳ぎかな
積乱雲筋骨秘めてあるごとく
帰省の子いつしか「俺」になつてをり
三伏や白を違へて塩・砂糖
熱風の塊として高校生

直方 石橋 幾代

もう夫の名無き形代流しけり
雨三日華やいでゆく菊人形
ぎらぎらの日向を走る羽抜鶏
秋風や手帳に記す死後のこと
落葉掃く僧に鶏ついてまはる

北九州 河原 敬子

雁渡し手に載るほどの仏欲し
十人で満員の寺門茶受く
閻王の左右に書記や秋深し
閻王にも光背のあり秋土用
寂しければからだ動かし草の花

熊本 松田 明子

畦道の闇美しき虫送り
鳴り物が闇を押しゆく虫送り
神楽終へ息、づく大蛇畳まるる
馬役の引つ立てらるる村芝居
ポケットも柄も大きなサンドレス

千葉 原 友子

塔婆持つ人歩きをり稲の花
何もかも赦して熱き茗荷汁
土寄せの土に火照りや鳥渡る
辛抱の極みの色か吾亦紅
ひまはりの自暴自棄なる種を採る

岡垣 田中とし江

瀬しぶきの子の声高き夏休み
元冠の海に浮輪の色あまた
托鉢の僧の隈なき日焼かな
秋風や体重測る象きりん
台風の去りし夜明けの星あまた

大宰府 山本 則男

文旦を置けば部屋ごと丸くなる
猪垣の中に祭の始まりぬ
鼓打つたび月光の震へけり
ひとところ水を束ぬる下り染
鉦叩素直な闇となりにけり

粕原 吉田 菫

新生姜末広がり束ねらる
顔ぢゆうに藁くづを浴び稲を干す
村を守る砦のごとく稲架櫻
顔入れて鳥は熟れ柿つつきをり
枯菊のこんがらがつて立つてをり

糸島 小林 朱夏

サイレンに続く遠吠え原爆忌
稲雀遅れ飛び立つ五羽六羽
菊の香や女盛りは疾うに過ぎ
虎落笛うつすら開く死者の口
一晩で裸となりし大樹かな